

筑波大生の運動生活に関する縦断的研究

木原 資裕, 小原 晃, 外川 重信, 坂東 隆男

A Longitudinal Study on the Physical Activities in Daily Life of University Students

Motohiro Kihara, Akira Obara, Shigenobu Sotokawa and Takao Bando

Abstract

The purpose of this study was to investigate the longitudinal transition of the physical activities in daily life of students at the University of Tsukuba. 366 students who answered both first questionnaire (Jun 1981) in second-grade and second questionnaire (Apr 1983) in fourth-grade were subjects of this study. The types of the physical activities in daily life of students were classified into four typical classes, i. e. Club-class, Area-class, Program-class, and Stay-class, according to the category defined by Udo (1970)

The major results were summarized as follows:

- 1) A number of participants for sport activities in the University was low in fourth-grade, compared with other grades, especially in the number of participants for Program-class.
- 2) 84.3% of the members of all Stay-class students were not exercised except in physical education classes for two years.
- 3) As to the Club-class students in the fourth-grade, the frequency of practice was decreased, but the rate of the students satisfied with club activities was increased. The fourth-grade students' consciousness in club was changed from developing physical fitness and sports skill to enjoying the sports.
- 4) There is no difference between the reason of the second-grade students, not to belong to the sports club and not to use the sports facilities, and that of the fourth-grade students. But the reason not to be participated in sports programs of University was changed. It could be suggested that the desire to participate in sports events of the University become weak in the upper grades.

Key words : Physical activities in daily life · Consciousness · Tradition · Longitudinal study

I. 緒言

筑波大学では、正課体育の4年間履修、スポーツデーの開催、あるいは体育施設の整備・開放などをとらえて、生涯スポーツのための教育に努めてきた。これらの教育を成果をみるためにそして学生が日常生活に運動をどのように取り入れているかを把握するために、筑波大学体育センターでは、共同研究の一環として、昭和56年6月、ならびに昭和58年4月に「運動生活調査」を実施した。近年、学生のスポーツ活動に対する選好に多様化が見られるために、大学が学生に提供する体育事業のありかたを再検討するデータとして有効な調査となっている。これらの調査結果については、大学体育研究第4号¹⁾、第5号²⁾、第6号⁴⁾に報告がなされている。

山川⁴⁾や鈴木⁵⁾によって、大学生のスポーツ参加や運動生活は、過去のスポーツ経験や運動部所属経験と関連を持つことが指摘されている。また、山川⁴⁾の調査研究では、高等学校時代まではスポーツに対して消極的であった者が、大学入学後にスポーツクラブに所属したり、自由なやり方で自由時間に運動を楽しむものも存在するが、3年生になると、体育の授業以外に意図的には運動を行わないStay階層もかなり増加する傾向にあることが報告されている。

大学生の運動生活の様相は、どのようなものが望ましいかについて、簡単に結論づけることは困難であるが、宇土⁶⁾は運動生活を活動の継続性、組織性、合理性という条件からとらえ、Club階層を第一階層としている。また、入口⁷⁾も、スポーツの実施程度は、スポーツクラブに参加しているか否かによって決定的に規定されるとしている。

これらの先行研究を踏まえ、本研究では、新しい視点として、昭和56年6月と昭和58年4月に筑波大学体育センターが実施した「運動生活調査」を縦断的にとらえ、以下のことを明らかにすることを目的とした。

①宇土⁶⁾の運動生活のとらえ方に基づき、大学生の運動生活の類型をとらえ、大学2年次から4年次における運動生活の類型移動の状況を明らかにすること。

②運動クラブ所属者・プログラム参加者・エリア利用者のそれぞれの運動者における2年次から4年次への意識や抵抗条件の変化を明らかにすること。

II. 研究方法

1 調査の実施

調査対象は、体育専門学群の学生を除く共通体育受講生のうち、本学での生活経験のある2年生以上とした。第1回目の調査は昭和56年6月に実施し、2023名を対象とし、有効サンプル数1268(回収率62.7%)を得た。第2回目の調査は昭和58年4月に実施し、4200名を対象とし、有効サンプル数3150(回収率75.0%)を得た。

2 分析の視点

本研究は、第1回目の調査と第2回目の調査の両調査ともに回答した366名の学生(男子267名、女子99名)を対象とした。すなわち、2年次の時と4年次の時における運動者の変容を縦断的に捉えようとした。なお、運動生活の類型のとらえかたは、宇土の分類法に依拠した。(表1)

これまでの2回にわたる調査では、各運動者に様々な質問がなされているが、質問項目や質問形式に1部変更がなされており、まったく同一の調査がなされたわけではない。特に、各運動者の意識に関する質問において、第一回目の調査では、「最もあてはまると思われるものから順に3つの範囲で」選んで答えさせているが、第二回目の調査では、それぞれの項目に対して、「1. 最もあてはまる」「2. ややあてはまる」「3. どちらともいえない」「4. あまりあてはまらない」「5. まったくあてはまらない」の5段階に回答さ

表1 運動生活の種類

| 体育事業／運動生活の種類 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
|-----------------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| C.S(クラブ・サービス) | ○ | ○ | ○ | ○ | / | / | / | / |
| P.S(プログラム・サービス) | / | ○ | / | ○ | ○ | ○ | ○ | / |
| A.S(エリア・サービス) | / | / | ○ | ○ | / | ○ | ○ | / |

- 1…クラブ運動者としての生活(C)
- 2…クラブ運動者であると同時にプログラム運動者としての生活(C・P)
- 3…クラブ運動とエリア運動者が組み合った運動者としての生活(C・A)
- 4…クラブ運動者, プログラム運動者, エリア運動者の三つが組み合った運動者としての生活(C・P・A)
- 5…プログラム運動者としての生活(P)
- 6…プログラム運動者とエリア運動者としての生活(P・A)
- 7…エリア運動者としての生活(A)
- 8…いずれの体育事業にもかかわりのない Stay 運動者(S)

(宇土正彦, 体育管理学, 大修館書店1970による)

れる形式に改めている(資料Ⅳ参照)。しかしながら, その質問内容はほぼ同一のものであり, 質問間で順位づけを行うことにより, 比較検討することは妥当であると考えられる。よって, 3つの範囲で回答させている質問においては, その項目の選ばれた回数が多い順に, また5段階に回答させている場合には, 「最もあてはまる」「ややあてはまる」の多いものから順位づけを行い, 項目の順位の移動により, 運動者の意識の変化を捉えようとした。

Ⅲ. 結果と考察

1 運動者と運動生活の種類

1) 運動クラブの所属, プログラムへの参加およびエリア利用の状況

図1は, 2年次と4年次における運動クラブへの所属の状況をあらわしたものであるが, 所属していると答えたものが, 47.4%から34.8%へと減少している。また, 図2の2年次と4年次におけるプログラムへの参加状況においても, 参加したと答えたものが76.0%から44.1%へと大幅に減少している。図3の2年次と4年次におけるエリア利用状況においては, 「ある」と答えたものが60.6%

から58.0%へと減少しているものの, その差は図1・図2に比べるとはるかに小さい。

図1・図2・図3をとうしてみると, 大学で行われている体育事業における学生の参加者数は, 4年次になると低下しており, 特にプログラム参加への状況に著しくあらわれている。

2) 運動生活の種類の変動について

図4は, 2年次と4年次における運動生活の種類を示したものである。これらの種類は, 表1に示したように体育事業とのかかわりで分類されている。S(種類8)とA(種類7)の数が4年次に増加している。特に, 正課体育の授業以外には意図的な運動をしていないS(種類8)の増加が目立つ。一方, C・P(種類2), C・A・P(種類4), P(種類5), P・A(種類6)の数が減少しておりプログラムサービスが関係している種類のみ減少傾向がみられる。

さらに, 詳細に2年次から4年次への運動生活の種類の変容をあらわしたものが, 図5である。S(種類8)以外は, それぞれの種類において, 過半数以上のものに2年次から4年次において種類の移動がみられる。20%以上の種類の移動が見られるものをあげてみ

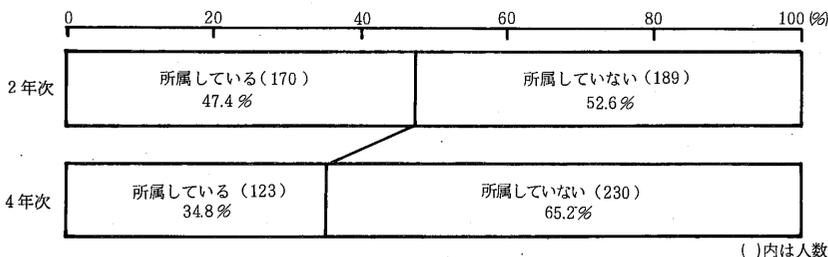


図1 2年次と4年次における運動クラブへの所属

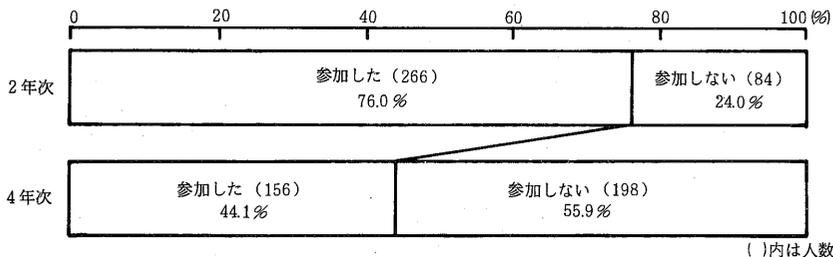


図2 2年次と4年次におけるプログラムへの参加

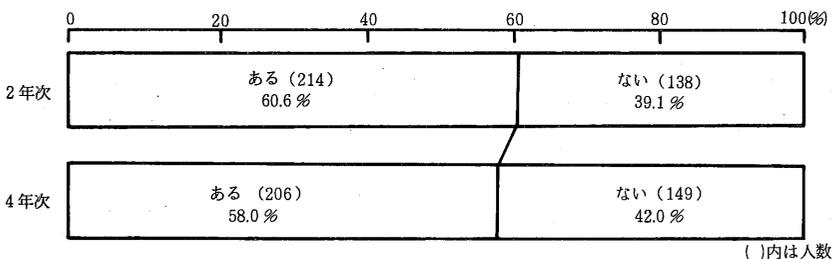


図3 2年次と4年次におけるエリア利用

ると以下の通りである。

C・A (類型3) からC (類型1) へ25.0%, C・A (類型3) からA (類型7) へ43.8%, P (類型5) からS (類型8) へ41.9%, P・A (類型6) からA (類型7) へ25.6%, P・A (類型6) からS (類型8) へ25.6%, A (類型7) からS (類型8) へ40.0%となっている。

C・A (類型3) からの移動をしてみると、C (類型1) とA (類型7) への二つわかれている。しかし、A (類型8) への移動の方が割合的には大きい。つまり、クラブ運動とエリア運動が組み合っ運動者としての生活

から、クラブ所属がなくなったエリア運動者としての生活になることが割合的に多いことを意味している。又、P・A (類型6) においては、A (類型7) とS (類型8) への移動が、同じ割合でなされている。P (類型5) とA (類型6) においては、S (類型8) への移動が40%以上もなされており、4年次におけるS (類型8) の占める割合が増加していることがわかる。

一方、S (類型8) においては、全体の84.3%にあたるものが、2年間にわたって正課体育の授業以外には意図的な運動を行っていないことがうかがえる。筆者らは、これまで2回

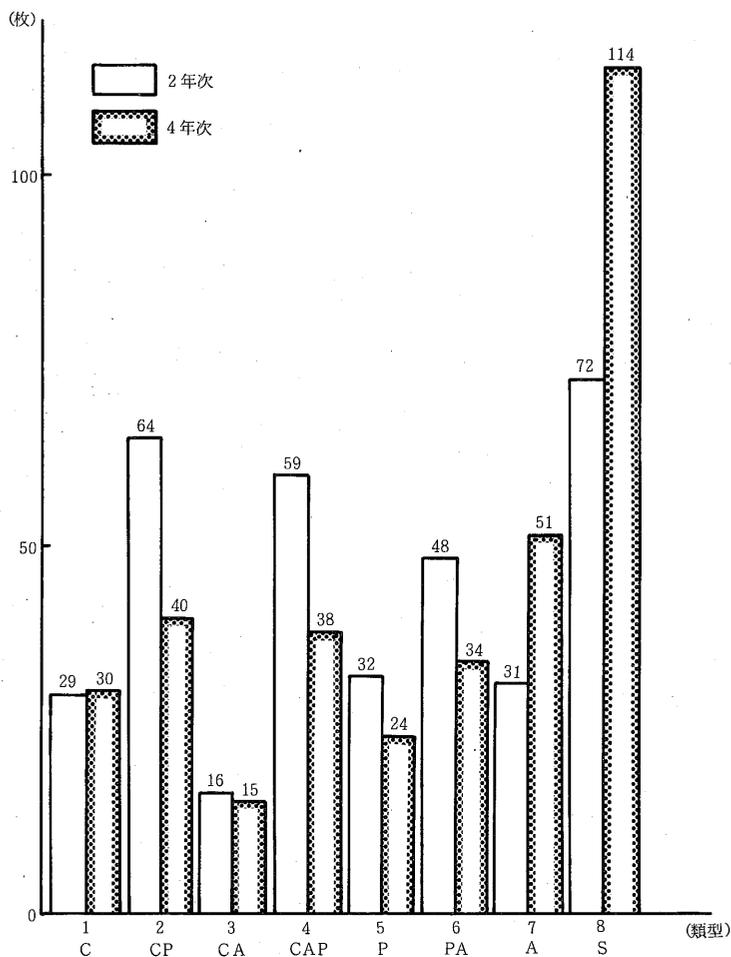


図4 2年次と4年次における運動生活の類型

の調査の中で、S(類型8)に高校時代からの運動に対する消極性や運動嫌が多く存在し、それらと表裏一体の関係にある体力・運動能力の低下が見られることを指摘してきた⁸⁾。ここでは、さらに、卒業後も自ら意図的な運動をおこなうことはかなり困難な状態におることが予想できよう。

しかしながら、図5におえる全体的な2年次から4年次へかけての傾向を見てみると様々な移動パターンが存在しており、大学における体育事業に学生が複雑に入り組んで反応しているといえよう。

2 各運動者における2年次から4年次における意識の変化

1) 運動クラブへの参加日数とクラブへの満足度

図6・図7は、運動クラブへの参加日数とクラブへの満足度を示したものである。2年次においては、「週5回以上」と「週3回以上」と答えたものの合計が73.0%であったのに対し、4年次においては、その合計が31.8%となっており、約2分の1に減少している。一方、クラブへの満足度において、2年次に「非常に満足」「やや満足」と肯定的に回答しているものは全体の57.0%であるのに対し、4

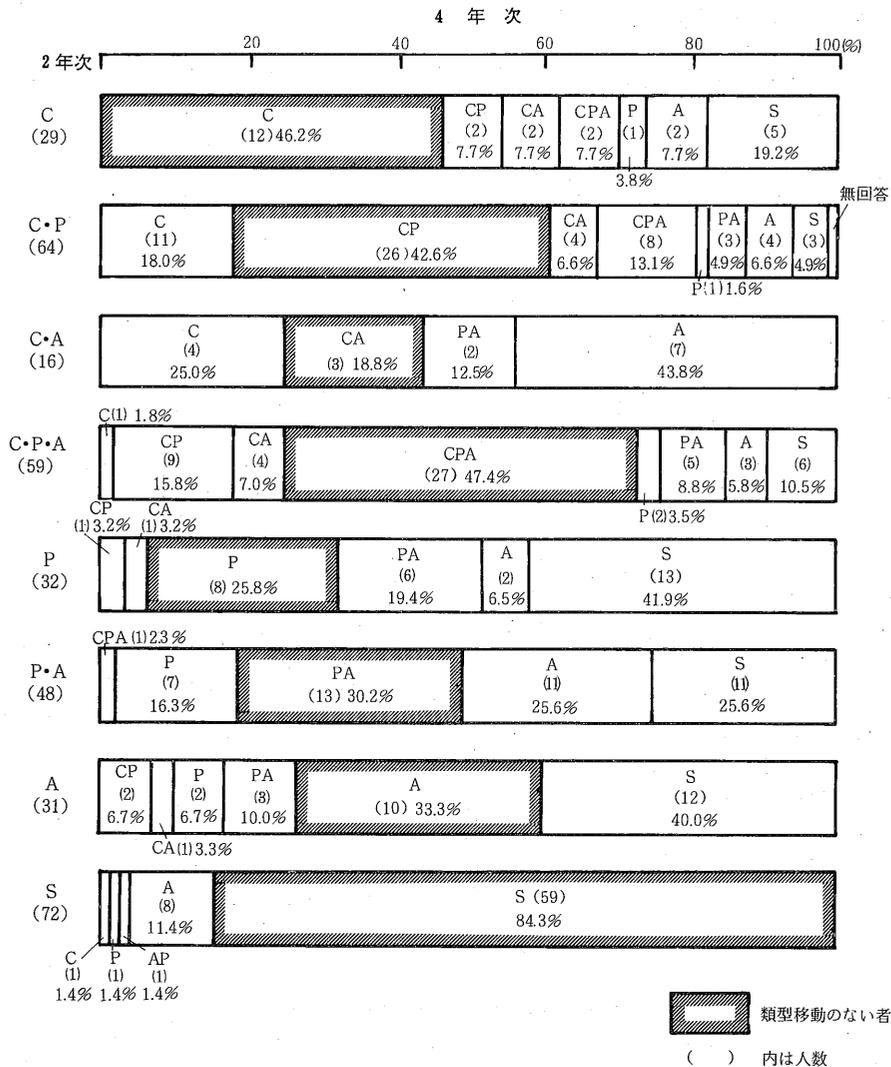


図5 運動生活の類型における2年次から4年次への変容

年次では66.7%となり、約10%の肯定的な応答の増加が見られる。2年次から4年次への時間的な経過のなかで、練習参加の日数が減少し、満足度が増すことは、クラブ運動者のクラブに対する意識に変化があることを表わしているといえよう。

2) 所属しているクラブに対する好ましい評価の変化

図8は、2年次と4年次における所属しているクラブに対する好ましい評価の変化を示

したものである。「友人・仲間との交流」が2年次と4年次ともに1位であり、クラブ活動の中で、最も好ましい評価を受けている。また、「体力・運動能力の向上」が2位から7位へ、「練習の意義と技能の向上」が3位から5位へと順位が下がっているのに対し、「よろこびの体験」が9位から2位へ、「情緒の安定」が12位から6位へと順位が上がっている。このことは、4年次においては体力や技能の向上よりも、スポーツを楽しむ方向

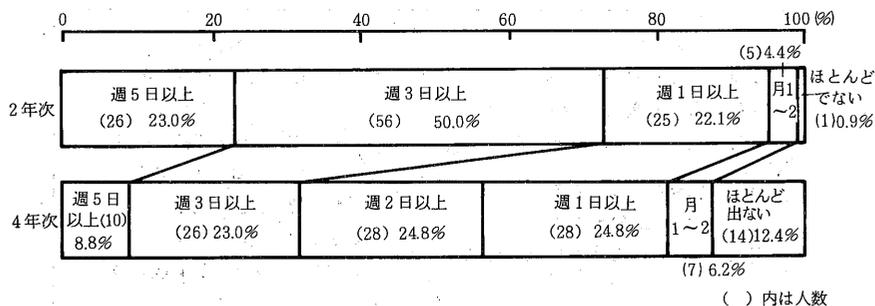


図6 練習参加日数

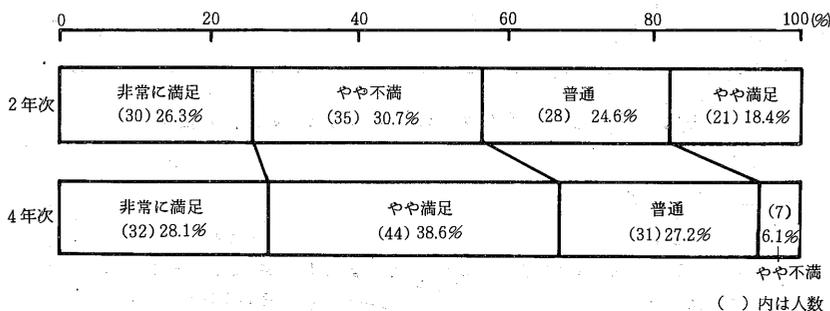


図7 クラブへの満足度

に意識が変化していることを示すものであり、2年次と4年次における特徴的なクラブへの評価の傾向になっている。

3) 所属しているクラブに対する改善要求の変化(図9)

2年次の調査における「時間的余裕」が4年次の調査項目に取り入れられていないが、4年次の1位である「練習計画やそのやり方」に内容的に含まれるものと考えられよう。2年次から4年次にかけて改善したい順位が上がった項目は以下のようなものがある。「メンバーの不足」が7位から3位へ、「練習のための施設・用具」が7位から4位、「指導者・指導方法」9位から5位であり、これらは、より充実した練習を行うための改善要求といえよう。また、このことは4年次における運動者がクラブ内で果たさなければならない役割意識がかなり働いていることも考慮しなければならないであろう。

4) クラブ所属に対する抵抗条件の変化(図10)

図10は、なぜ運動クラブに所属しないかを示したものである。2年次の「時間をとり、疲れもあって学業に影響するから」の質問項目は、4年次においては、「練習で疲れる」と「時間がとられ、学業に影響する」に内容的に2つにわかれており、2つ合わせると順位的には2位相当にあたる。このことから、2年次と4年次の項目の順位はほぼ同じであり、クラブ所属に対する抵抗条件はほとんど変化していないといえよう。2年次と4年次において「運動よりもほかに好きな活動がある」がともに、クラブ所属に対する最も強い抵抗条件になっている。

5) 運動プログラム参加による自己への影響の変化(図11)

「クラスのまとまり」が1位から4位へ順位が下がっている。このことは、4年次にお

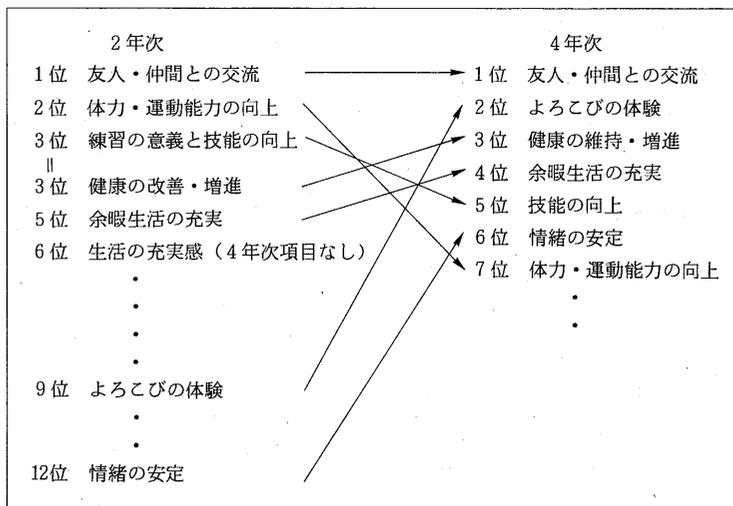


図8 所属しているクラブに対する好ましい評価の変化

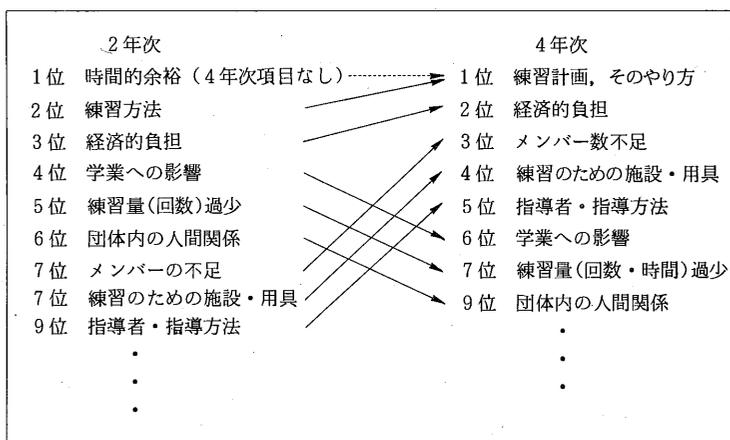


図9 所属しているクラブに対する改善要求の変化

いては、クラスごとの活動がより少なくなっていることと、それに関連してクラスに対する認識が低くなっていることが考えられる。しかし、一方、「交友関係のひろがり」が3位から1位へと順位が上がっており、クラスという大学における授業形態がもたらす枠組みでなく、もっと私的なレベルでプログラムに参加している者の割合が多くなっているといえよう。また、「自己の体力についての認識」の順位が5位から2位へ上がっている。前述

したように、プログラム参加者の数は、2年次から4年次にかけて大幅に減少しているものの4年次に自分の体力に関心のある者はプログラムに参加する傾向にあるのではないかとと思われる。

6) 運動プログラム参加に対する抵抗条件の変化 (図12)

「早朝から試合があり、めんどうだった」が3位から1位、「参加の手続きがめんどうである」が、4位から3位、に見られるよう

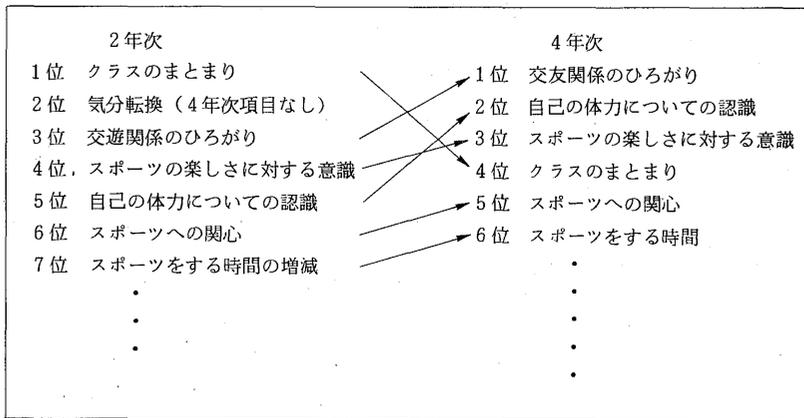


図10 クラブ所属に対する抵抗条件の変化

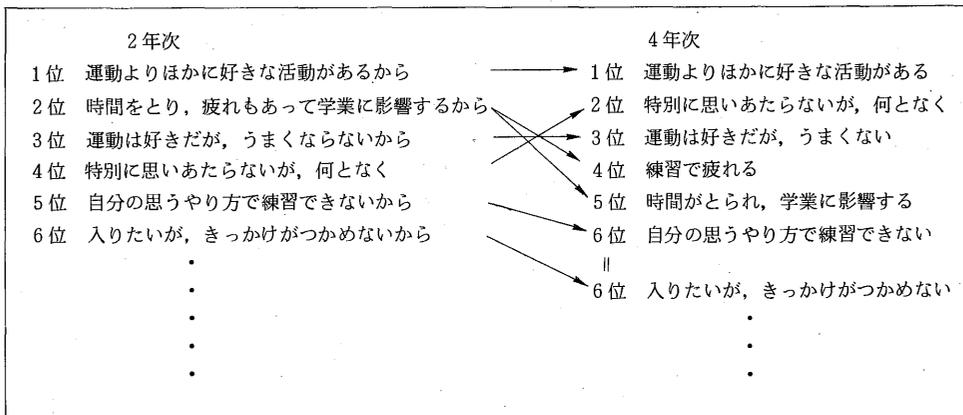


図11 運動プログラム参加による自己への影響の変化

に学生のプログラム参加に対する意欲が低下していることを指摘できよう。また、「他の活動と重なった」においては、7位から2位へと順位が上がっている。このことは、大学の授業が休講措置される春秋のスポーツデーを利用して、様々なサークル活動や個人的な所用を満たす機会に利用されているのではないかと推察できる。

7) エリア利用に対する抵抗条件の変化(図13)

図13のように、2年次から4年次にかけて1位と2位、4位と5位の順位に入れ替わりがあるものの、全体としてはエリア利用に対

する抵抗条件はあまり変化していないといえよう。

VI. ま と め

筑波大学生の2年次から4年次にわたる運動生活の変容を縦断的に捉えるために、第1回調査（昭和56年6月）と第2回調査（昭和58年4月）の両調査にともに回答した366名の学生を対象に分析・検討を行った。

結果は次のようにまとめられよう。

1) 2年次と4年次における運動クラブの所属状況では、所属していると答えたものが、47.4%から34.8%へと減少している。また、

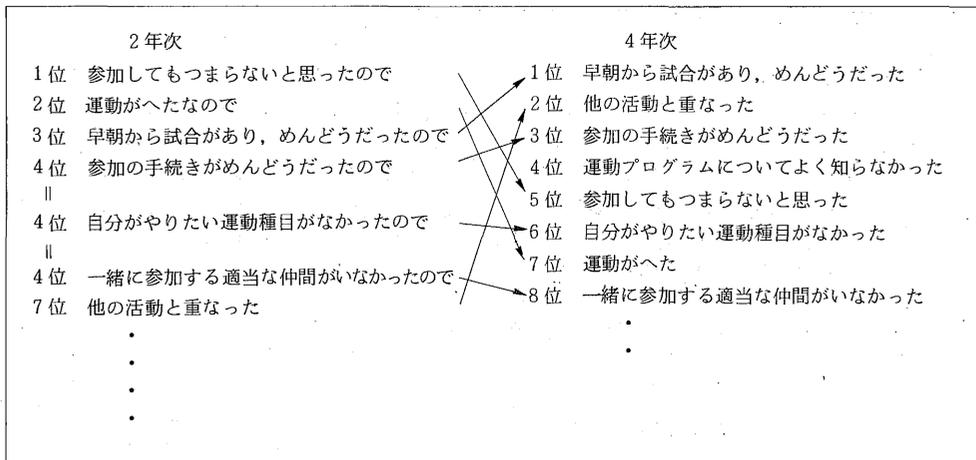


図12 運動プログラム参加に対する抵抗条件の変化

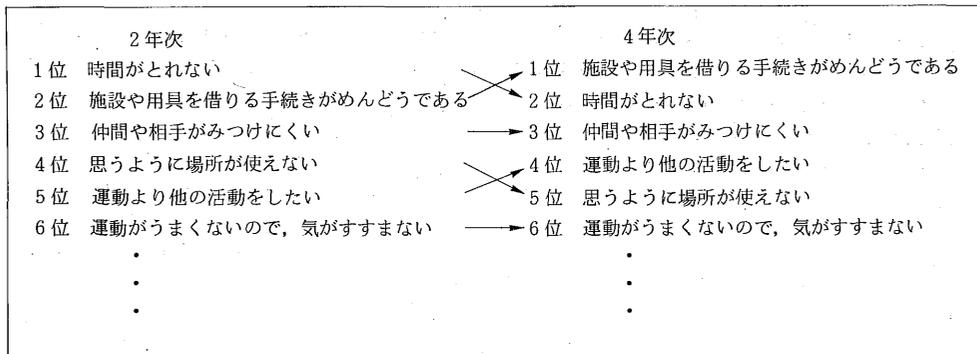


図13 エリア利用に対する抵抗条件の変化

プログラムの参加状況では、参加したと答えたものが76.0%から44.1%へと大幅に減少している。エリア利用の状況での、利用したと答えた者が60.6%から58.0%へと減少している。大学で行われている体育事業における参加者数は、4年次になると低化しており、特にプログラム参加状況に著しくあらわれている。

2) 運動生活の類型における2年次から4年次への変容を見てみると、S(類型8)以外はそれぞれの類型において、過半数以上の者にタイプの移動がみられる。S(類型8)においては、全体の84.3%にあたるものが2年

間にわたって正課体育の授業以外には意図的な運動を行っておらず、S(類型8)状態が継続する傾向を示している。

3) 運動クラブへの練習参加日数とクラブへの満足度の関係において、2年次から4年次へかけて、練習参加日数は減少するが、満足度は増している。また、所属しているクラブに対して好ましい評価についても、4年次では、体力や技能の向上よりもスポーツを楽しむ方向に意識が変化している。さらに、所属しているクラブに対する改善要求の変化では、4年次において「メンバー不足」「練習のための施設・用具」「指導者・指導方法」

等のより充実した練習を行うための改善要求が強くなっている。

4) クラブ所属に対する抵抗条件とエリア利用に対する抵抗条件は、2年次と4年次においてほとんど変化していない。しかし、運動プログラム参加に対する抵抗条件では、4年次におけるプログラム参加への意欲の低下と様々なサークル活動や個人的所用を機会に利用されていることを指摘できる。

以上のことから、筑波大学における学生の運動生活のおおよその経年的変化を把握することができよう。これらのデータから実際にどのような大学体育事業の改善の方途が思索できるであろうか。

1つには、体育授業以外に意図的な運動をしていないS(類型8)階層が継続し、かつ増加している傾向に対する指導である。学校教育で体育の授業が行える最後の機会に、生涯体育につながる運動の生活化を目指した教育的指導が必要であるといえる。たとえば、S(類型8)階層を対象とした授業外の特別指導や講演など、その具体的指導法の試行錯誤がなされなくてはならないであろう。

もう1つには、プログラム参加者数の減少に対する方策である。開催方特、種目の選定、公報等の検討や体育授業の成果を試す機会として捉える等々の改善方法が考えられよう。

さらに、体育授業の影響を受けやすいと思われるエリア利用者の育成と内容の充実を授業を通して行っていくことなど考えられる。

また、これまで、宇土の運動生活の類型の考え方を基盤として、調査を行っているが、今後、運動の内容・時間等々の要素も検討し、

より多くの学生の実態を把握するために、さらに新しい視点からの調査も必要であろう。

引用文献

- 1) 浅田隆夫ら：正課体育のカリキュラム編成とその具体的教育方法の改善に関する研究，大学体育研究，4：105-200，1982.
- 2) 松下雅雄，山川岩之助：筑波大学生の正課体育への対応状況，大学体育研究，5：51-64，1983.
- 3) 椿本昇三：運動生活階層別にみた筑波大学学生の健康への意識と体力・運動能力との関係，大学体育研究，5：65-72，1983.
- 4) 山川岩之助ら：筑波大学生の運動生活に関する調査，大学体育研究，6：63-104，1984.
- 5) 鈴木文明，中島豊雄：学生スポーツ参加に関する一考察，総合保健体育科学，7-1：111-122，名古屋大学総合保健科学センター，1984.
- 6) 宇土正彦：体育管理学，101-156，大修館書店，1983.
- 7) 入口豊ら：大学生のスポーツ参加を規定する要因，スポーツ教育学研究，3-2，49-58，1984.
- 8) 宮地力ら：Stay階層の運動生活，大学体育研究，4：177-180，1982.

参考文献

- 1) 江口篤寿ら：筑波大学生の体育・スポーツに対する意識について，大学体育教本，447-454，不味堂出版，東京，1977.
- 2) 江刺正吾：学生の生活とスポーツ，道和書院，1980.
- 3) 松本寿吉ら：生涯体育の視点からみた大学体育のあり方に関する研究，九州地区生涯体育研究会，1980.
- 4) 筑波大学：筑波大学学生生活調査，1980.
- 5) 筑波大学：昭和59年度 筑波大学学生生活実態調査，1985.